

# 姫路城、狎光景

## 殿様とわんこ

くらいつく犬とぞかねてしるならばみな世の人のうやまわんわん

これは『耳囊』に記されている酒井忠以とその飼犬の逸話にある公家、京童の口遊みです。

安永10年(1781)2月、忠以(ただぎね)が台命で光格天皇の即位と元服を祝うための使者として朝廷に出仕することになりました。江戸出立の時、忠以の飼犬の狎が駕籠から離れないので品川宿まで連れていくことにしましたが、結局京都まで同道し、感心した天皇が狎に官位(六位)を授けた(くらいがついた)という逸話です。狎は品川で駕籠から引き離そうとした家臣に「喰らいついた」というのですから、なかなかの凶暴さと主人の溺愛ぶりが察せられます。



参考・『狎の嫁入』(国会図書館蔵)  
嫁入りした狎が元気な男の子を4人?出産したところ

しかし、この上洛の記録(『玄武日記』)には狎のことは皆無で、忠以は品川まで駕籠ではなく馬に乗っています。『耳囊』もこの逸話を「根なし事」とはしていますが、酒井家で狎が飼われていたことは間違いありません。

ところで、姫路城内には藩主や役人が執務をする三の丸の本城(居城)のほかに、東屋敷という御殿がありました。たとえるなら、本城が官邸、東屋敷は公邸で藩主とその家族の住まいとなっていました。藩主は家族とともに東屋敷で寝起きをし、起床すればここから本城へと出勤する日常をおくっていたのです。藩主と家族の日常についてはよくわかっているとは言い難く、関係する史料を読み進めているところです。

文政12年(1829)9月23日のことでした(以下、「文政十二丑年日記」酒井家資料A-239による)。

### (前略) 外箱は御作事方ニテ出来之事

姫路藩の作事方が、「外箱」を作るように命じられました。そのきっかけは、涼しくなって毎日の庭の打ち水もしなくなった、8月17日までさかのぼります。

#### 一、御狎さじ不快二付、御狎医師罷出候

8月17日の記事によると、屋敷で飼う狎(犬種および小型犬全般の呼称でもある)「さじ(左治)」の具合が悪くなり、「御狎医師」が屋敷に召喚されたというのです。狎専門の獣医かもしれません。その医師は城下の竹田町に住む「くじら屋弥吉」でした。弥吉の処方は適切だったのか、その後、狎の具合については記録がありません。しかし、それから約1か月後の9月20日、「さじ」の具合がまた悪化し、弥吉が再び召喚されました。このとき弥吉のことを「狎屋」と呼んでいますから、姫路城下には狎

を専門に扱う業者が存在し、その主人は狎の調達だけではなく、診察・治療もできる万全の“アフターサービス”ができる専門家であったとみられます。「くじら屋」の屋号からは想像できない商売といえましょう。

再度の弥吉召喚にもかかわらず、「さじ」は22日、ついに死んでしまいました。

#### 一、御狎先達を少々不快二有之候所、今夜六ツ時過落ル

弥吉の治療で快方に向かったように見えて安心していたのか、22日には弥吉を召喚した形跡はありません。ある時点で「さじ」の容態が急変したのでしょうか、午後6時頃に息を引き取りました。そう、左記の「外箱」とは、「さじ」の埋葬に必要な容器だったのです。この日、藩主(忠実:ただみつ。忠以の次男)は朝早くから城の南東約4kmほどのところにある仁寿山(じんじゅさん)へ出かけていました。帰館したのは午後5時頃でしたから、「さじ」の死に目には会えたことでしょう。

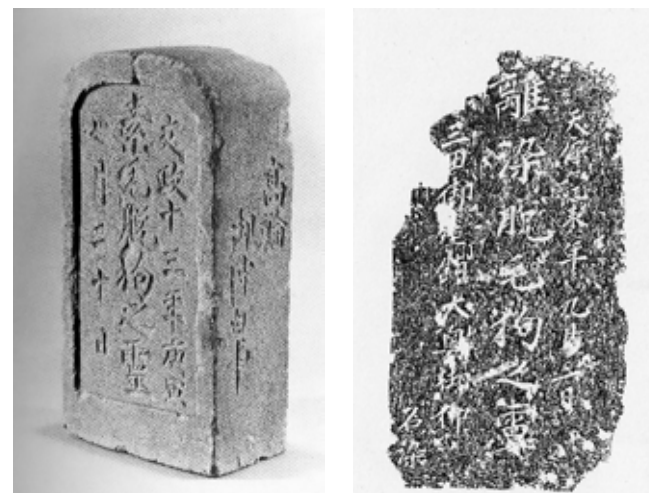
「さじ」の遺骸はそのまま屋敷に留め置かれたようで、翌23日、茶毘に付されました。

#### 一、御狎茶毘夜斃候二付、今昼時過坂田町景福寺へ遣ス瀧沢万次 小遣儀蔵

#### 一、回向料・穴掘料共金百疋香包致持参、杉源左衛門殿方御手金請取諸払致候、外箱は御作事方ニテ出来之事

景福寺は姫路城下における酒井家の菩提寺で、そこで「さじ」を火葬するため、この日の昼頃に屋敷から遺骸が移送されたとみられます。「さじ」は小遣の儀蔵が運んだのでしょうか。そして、供養と埋葬のために墓掘りが行われました。その費用は、瀧沢万次が奥方役人である杉源左衛門から受取って支払っています。ちなみに瀧沢は、9月23日の夜詰(泊り)になっています。23日の東屋敷における当番は日中から瀧沢が担当でしたので、「さじ」の埋葬もすることになったとみてよいでしょう。彼はそのまま夜詰となり、翌24日に当番を藤塚九内に引き継ぎ、自身は藤塚のサブとなって勤務しました。どうも東屋敷では、当番は2日おき、夜詰は3日おきのローテーションだったようです。

作事方が作った「外箱」の中には蔵骨器が納められていたかもしれません。どのような墓だったかも不明です。いずれにしても供養され菩提寺に埋葬されたことからすると、愛情いっぱい飼われていた狎であったことは間違いのないでしょう。



江戸城下から出土した犬の墓石

忠以のもとを離れず、引き離そうとすると「喰らいついた」狎の存在も、決して大げさな話ではない気がしてきました。(K)

左：側面に「高輪 御狎白事」白という狎の墓  
 右：「三田御屋鋪大奥狎 名染」染は三田屋敷の大奥で飼われていた。  
 (『江戸動物図鑑』港区立郷土資料館、2002より)